

よりよい社会の実現を 目指す児童の育成

— コミュニティ・スクール先進校としての社会科授業の創造 —



岐阜県岐阜市立岐阜小学校 代表

岐阜小学校 校長

ふじ た ただひさ

藤田 忠久

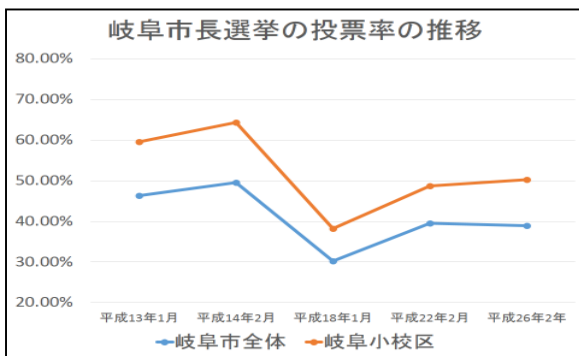
1961年生まれ。1984年3月岐阜大学教育学部卒業。同年4月岐阜県公立小・中学校教員。(この間)1995年4月～2003年3月及び2012年4月～2015年3月岐阜大学教育学部附属小学校勤務。2006年4月～2010年9月岐阜市教育委員会勤務。2015年4月岐阜県公立小・中学校校長。2019年4月岐阜市立岐阜小学校に赴任。現在に至る。

1 はじめに

岐阜市は、中心部に清流長良川が流れ、緑豊かな金華山がそびえる自然に溢れた街である。1300年の歴史を誇る長良川鵜飼や織田信長公ゆかりの岐阜城など、歴史の街としても知られている。

岐阜小学校は、まさに信長公が美濃国を攻略して「岐阜」と改めた城下町を校区としてきた金華小学校と、新市庁舎・警察署・消防署・裁判所等が立ち並ぶ官公街を校区とする京町小学校の二つの伝統校が統合し、平成20年度に開校した学校である。開校以来、岐阜市最初のコミュニティ・スクール（以下CS）に指定され、文部科学省の研究指定事業として「地域や家庭との連携・協働教育プログラム」を開発し、「ふるさと大好き」を合い言葉に先駆的な実践を進めてきた。13年目の現在、持続可能な「地域創造型」の学校への進化・発展を目指しているところである。

また、岐阜小学校区は、市長選挙における投票率が、市の平均よりも毎回10%程も高い地域である（図1参照）。そんな地域で将来を担うことができるよう、本校では故郷に愛着と誇りをもち、地域の一員として社会に参画することができる児童の育成を目指している。



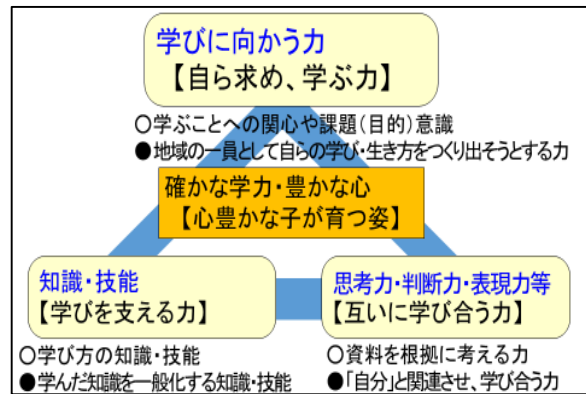
【図1：岐阜市長選挙の投票率の推移】

2 主題設定の理由

平成30年度の岐阜小学校「学習状況調査」結果を基に、児童の実態を分析したところ、右上の図2のような傾向が明らかになった。

そこで、学習指導要領改定に伴い、地域や児童の実態を踏まえながら、CSとしての社会科授業

の創造を目指して、研究主題「よりよい社会の実現を目指す児童が育つ社会科学習」を設定した。



【図2：3観点を基に把握した児童の実態】

3 研究のねらい

研究で願う「よりよい社会の実現を目指す児童」の姿を、観点別に次のように描いた。

【知識及び技能】

- 人々の社会的な営みや願いに共感しながら、情報を適切に活用し、社会生活を理解する姿

【思考力・判断力・表現力等】

- 資料や既習内容、仲間の考えと関わらせながら、社会的事象の意味を追究して伝え合う姿

【学びに向かう力・人間性等】

- よりよい社会の実現に向けて、意欲や愛情、自覚が高まる姿

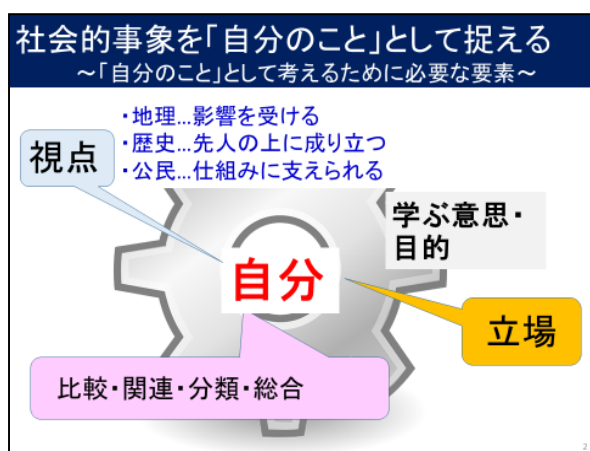
また、これらの姿に迫るために立てた研究仮説は、以下の通りである。

地域の人的・物的財産を有効に活用した教材を開発し、地域人材と共に学び合う機会を設け、児童理解に基づいて、社会的事象の見方・考え方を働かせながら、特色や意味を自分と結びつけて考えたり、獲得した社会認識を生かしたりすることができるような指導・援助を行えば、社会的事象を「自分のこと」として考えられるようになり、よりよい社会の実現を目指す子が育つ。

言い換えると、「社会」と繋がり、その「社会」を動かす「自分」になる児童像を描き、その関係を次の図3のように示すこととしたのである。



また、社会を動かす「自分」になるために必要な要素を洗い出し、図4のようにまとめた。



社会的事象を「自分のこと」として捉えるための要素として、以下の4つを考えたのである。

① 社会を見るために必要な「着目する視点」

私たちの社会は、先人の営みの上に立って、社会の仕組みに支えられ、互いに影響を受けながら成り立っている。このことを認識するための「着目する視点」として、「地理的な視点」（位置や空間の広がり）、「歴史的な視点」（時間の変化）、「公民的な視点」（人や社会の仕組み）の3つを示し、課題を追究できるようにする。

② 多角的に考えるための「立場」

社会で起きている事実を客観的に捉え、公平な判断をするには、社会的事象を多角的に考えることが大切である。そのために、以下のような多様な立場から考えることが大切である。

【多角的に考えるために必要な立場】

- ・生産者 ・消費者 ・行政（国・県・市）
- ・国民 ・地域の人 ・自分
- ・高齢者 ・子供 ・障がい者
- ・為政者 ・武士 ・農民（百姓） など

③ 社会的事象の特色や意味を考える方法

社会的事象の特色や意味を考え、視点と視点を繋げたり、立場を分類したりして考える方法を理解して活用することが、さらに考えを広げ深めることに繋がる。そのために、2つ以上の事象について、以下の考え方などを活用して追究することができるようにする。

- ・ 比べて考える。 …（比較）
- ・ 繋いで考える。 …（関連）
- ・ 分けて考える。 …（分類）
- ・ まとめて考える。 …（総合）

④ 追究を支える「学ぶ目的・意思」

前述の①～③に、子供たちの学ぶ目的や意思が加わることで、自ら「自分という歯車」を回すことができる。つまり、新学習指導要領で示されている「学びに向かう力、人間性」を高める学習を展開することを、一層重視しなければならない。

4 研究の内容

（1）社会的事象を「自分のこと」として捉えるための地域教材の開発

C S先進校の岐阜小学校では、これまでも地域教材を効果的に活用した社会科授業を行い、そのよさを次のように考えてきた。

- ・ 課題追究の際に、生活経験と繋いで考えることができ、意欲を高めることができる。
- ・ 市民や消費者の立場で考えやすく、多角的に考えることができる。
- ・ 社会や人物を身近に感じることで「今日的な社会の課題」「人物の深い思い」に迫ることができる。

- ・ 単元の終末において「自分にできること」を考えやすく、よりよい社会生活の実現へ生かそうとすることができる。

これらに加え、社会を動かす「自分」になるために必要な要素を整理したことで、社会的事象を「自分のこと」として捉える児童の姿を、明確にすることができた。しかし、「自分で社会を動かしたい」と願っても、「社会」と繋がっている実感が乏しかったり、空回りしたりしては、社会的事象を「自分のこと」として捉え、本当に「社会」を動かす「自分」になることはできない。

そこで、下の図6のように、「社会」と「自分」の間に、もう1つ「地域」という歯車を噛ませることとした。



地域教材を開発し、その教材をコミュニティ・ティーチャー（地域の外部講師、以下CT）と共に学び合いながら、地域に向けて情報を発信したり、自分たちの願いやアイデアを地域に提言したりすることを通し、授業時間や授業後の活動において「社会を動かしている」と感じることができると考えたのである。

（2）「社会的事象の見方・考え方」を明確にした 単元構成と学習活動

子供たちが、よりよい社会の実現を目指して力強く歩み出すには、知識・技能や思考・判断・表現の力を身に付けた上で、主体的に社会と関わっていくことが大切である。

そのために、「課題をつくる」（主に見通しをもつ）、「事実を認識する」（主に知識・技能を身に付ける）、「意味を認識する」や「まとめる」（主に思考力・表現力を高める）、「選択・判断をする」（判断力を身に付け、学びに向かう力や人間性を育む）授業を、単元の中にそれぞれ位置付け、1単位時間ごとの役割をはっきりさせるようにする。

また、「事象の内容は分かったから、次は事象の起きた理由を考えたい。」など、子供の意識が繋がる単元を構成する。子供の意識を繋ぎ、学びをより確かにするには、単元を通して「社会的事象の見方・考え方」を働かせることが大切である。そこで、前述の「着目する視点」や「考えるための立場」を、単元構成表の中に明記する。

単元を通して学ぶべき「内容」とともに、働かせる「社会的事象の見方・考え方」を明らかにすることで、子供たちは見通しをもって追究することができる。そのことによって、学ぶ意欲が高まるとともに、視点を関連付けた考察ができるようになるなど、「深い学び」にも繋がる効果があると考えたのである。

さらに、子供たちが1単位時間ごとに仲間と共に社会的事象を「自分のこと」として捉えるために、全体交流で見出した社会認識を再構成するために、次の4つを意識させるようにした。

- ① 共通性や順序性を考える。
- ② 「異なる立場」から考える。
- ③ 「他の事象」から考える。
- ④ 自分との関わりで考える。

単元の終末では、子供が社会と繋がり、よりよい社会を目指していくために「社会的事象の見方・考え方」を働かせながら、自分ができていることを考え、自分の行うことを決めていく学習を仕組む。そこでは、次の2つを重視する。

- ① 学んだことを一般化する。
- ② 社会への関わり方を選択・判断する。

5 指導の実際

(1) 社会的事象を「自分のこと」として捉えるための地域教材の開発

冒頭で述べたように、岐阜小学校区は、歴史・伝統・文化・産業・施設・人材など、学習素材に溢れる恵まれた地域である。これらを生かして進めてきたCS先進校としての「ふるさと学習」をもとに、新学習指導要領で求められる「公的資質を高める学び」へと発展させた社会科授業を創るために、3～6の各学年で教材開発を行った。

3年生は、小単元「工場の仕事」で、校区にある鮎菓子を作る和菓子職人（K店）を中心に、仕事の種類や工程を学ぶことができている。

4年生は、小単元「水はどこから」で伏流水を使った上水道の仕組みを学び、大単元「自然災害からくらしを守る」では水害からくらしを守る活動について学習するなど、校区に沿って流れる長良川を生かした教材を開発することができた。

6年生は「戦国の世から天下統一へ」の単元で、総合的な学習の時間とも絡めながら、「地元ならではの」と言える織田信長公の働きを学ぶことができるようになった。

これらの教材では、和菓子店、市水道局、水防団、河川事務所、歴史博物館等からCTを招き、各方面からの専門的な話を聞いたり、CTへの取材活動を行ったりしている。そして、総合的な学習の時間とも関わらせながら、自分たちが学んだ「ふるさと」の良さをまとめ、同学年や他学年の児童、保護者や地域の方々に発表していく学習を進めている。

ここでは、5年生の新単元である「情報を生かす産業」の地域教材開発について、詳しく述べることにする。

【実践例1】

5年生「情報化した社会と産業の発展

～情報を生かして発展する産業～

岐阜市が採用している小学校社会科の教科書を発行している東京書籍のHPには、「『情報を生かして発展する産業』については、児童にとって身近なコンビニエンスストアを取り上げました。販売情報や顧客情報を適切に管理しながら、新商品の開発にいかしたり、情報通信技術を活用したさまざまなサービスを提供したりしていることを調べ、大量の情報や情報通信技術の活用によって、産業が発展する様子を学習できるようにしています。」と掲載されている。

この単元の教材開発について、当初はリスクを背負って地域教材に挑むより、教科書に則った方が賢明という意見が多くあった。しかし、観光業に焦点を当てる挑戦は、この地域にとって大きな意味があり、校区にある老舗旅館Jが素材にできるのならば、子供たちが「自分のこと」と捉える学習になると考えを改めたのである。旅館Jに取材をし、学習指導要領が示す「大量の情報やインターネットなどで情報を瞬時に伝える情報通信技術などを活用していること」が判明した。旅館Jを通して、岐阜の観光業は「情報の種類や活用の仕方などに着目して、産業における情報活用の現状を捉え、情報を生かして発展する産業が国民生活に果たす役割を考え、表現すること」が、十分可能となる教材となる確証を得たのである。

こうして行った実践が、以下の通りである。

1 研究に関わる本単元の指導の重点

情報を生かして発展している観光産業の様子を明らかにするために、全国的にも有名な校区にある老舗旅館であるJを取り上げ、CTとして若女将や若旦那（I夫妻）を招き、共に学び合う。

旅館Jでは、様々な情報を集めて活用することで、自館の売り上げを伸ばすだけでなく、観光を通じた地域の活性化などに生かしていることを捉え、その内容や方法、理由等を考え、更なる発展を提言することによって、社会的事象を「自分のこと」として捉えられると考えた。

2 単元構成表

単元の入り口の意識

私たちの生活では、テレビや新聞、雑誌やラジオ、インターネットなどからたくさんの情報を得ている。中でも、インターネットは情報を受信だけでなく発信もでき、生活の中になくしてはならないものになっている。

こうした情報は、私たちの生活とどのように繋がっているのだろう。

<着目する視点>

- ・種類 ・活用
- ・繋がり

<考えるための立場>

- ・観光業者 ・観光客
- (自分, 家族)

第1時：生活の中の情報ネットワーク【課題を作る授業】

「情報」に着目して、観光の現状から学習問題を作ろう。

- 現在の日本は外国人観光客が増加している。インバウンドを取り込み、観光産業を成長させようとしている。
- 観光に関わるホームページも充実していて、口コミやおすすめを見て観光地を選んだり、旅館の予約もしたりするなど、観光と情報の関係が深い。
- 岐阜でも近年観光客が増えているが、観光の発展のために情報をどのように生かしているのだろう。

<用語・語句> ・インバウンド ・SNS ・ホームページ ・旅行代理店 ・Wi-Fi(情報の整備)

岐阜の観光を発展させるために、
情報をどのように生かしているのだろう。

第2時：観光業とビッグデータ【事実認識の授業】

旅館Jでは、お客さんに来てもらうためにどのような情報を集めているだろう。

- 旅館Jでは、宿泊客の情報だけでなく、旅行代理店の予約客のビッグデータに加え、地域の宿泊客や他の観光地の情報などの最新情報を共有しながら、お客さんを集めようとしている。
- 旅館Jのような情報の収集の仕方は、全国でも行われている。

<用語・語句> ・ビッグデータ ・情報の収集

第3時：情報を活用した観光業のおもてなし【事実認識の授業】

旅館Jでは、集めた情報をどのように活用しているのだろう。

- 旅館Jでは、宿泊客からの情報や旅行代理店の情報を活用して、客室などの施設を変えたり、朝食や夕食などのサービス提供の仕方を変えたりしている。これが、私たちの生活の向上にも繋がっている。

<用語・語句> ・情報の活用

第4時：情報を活用した観光サービスの地域への広がり【意味認識の授業】

旅館Jでは、どうして他の旅館などにも、自分たちの情報を教えているのだろう。

- 観光とは、旅館に泊まることだけでなく、遊びに来ることである。岐阜の観光の発展のためには、岐阜まち全体が盛り上がる必要がある。だからこそ、旅館だけでなく、岐阜の観光に関わるみんなで情報を共有する必要がある。
- 私も岐阜まちを盛り上げる地域活性化の一員であり、岐阜まちのよさを伝えることが大切だ。

<用語・語句> ・情報の共有
・地域活性化

第5時：情報を活用した観光業と地域活性化の関係をまとめる【まとめる授業】

岐阜の観光の発展のために、情報をどのように活用していたか関係図にまとめよう。

- お客さんや旅行代理店から集めたビッグデータを活用して、お客さんや利益を増やそうとしている。
- 地域の他業種の情報を集めて、岐阜全体で観光業をさかんにし、地域活性化に繋いでいる。

第6, 7時：これからの観光の発展のために【選択・判断の授業】

情報を生かして、これからの岐阜の観光を発展させるために大切なことは何だろう。

- 「観光は地域の光を觀てもらふこと」だから、私は、みんなと集めた情報を活用して、長良川のよさを発信する。美濃和紙との繋がりも話せるから、お土産にも興味をもってもらえそうだ。
- 地域の方も交えて話し合うと、地域がもっと好きになった。地域活性化させ観光業を盛んにする一歩は、情報の発信者として地域を好きになり、情報を発信するなど、地域の観光発展に関心を持ち続けることだ。

単元の出口の意識…観光業ではたくさんの情報を活用することを通して、お客さんにあったおもてなしができ、それが私たちの生活を向上させたり、地域活性化に繋がったりすることが分かった。だから、私も上手に情報を活用したいし、岐阜まちのよさを知り、発信しながら、観光を発展させる一員でありたい。

3 社会的事象を関連づけて捉え、多角的に考える学習活動

この単元は、CTも務めていただく旅館Jとの連絡を密に取りながら、全面的な協力を得て、毎時間の追究資料を作成して授業に臨んだ。

第3時は、旅館Jの情報活用について追究する時間となったのだが、子供たちは「宿泊客や旅行代理店のビッグデータや他業種の情報を活用し、宿泊プランを決めたり、部屋や温泉を時代に合わせて変えたりすることで、多くの人に来てもらえるような旅館にしている。」と考えることができた。



全体追究で見出した考えを基に、立場を変えて考えるよう促すと「観光客もよりよいサービスを受けられる」と気付くことができた。

そこで、CTである旅館Jの若女将Iさんから、実際の活用について詳しく聞くことで、旅館の発展が観光客の利便性の向上、国民生活の向上に繋がるという考えへと深めることができた。



このように、立場や視点を変えたり、自分との関わりを考えたりしながら学習をすることで、観光業と情報活用という社会的事象への理解を深めたり、社会的事象を「自分のこと」して考えたりすることができるようになった。

この単元の終末では、子供たち自身が情報を生かしながら、岐阜市（岐阜小学校区）のさらなる観光の発展や、地域活性化のために考えた方法をプレゼンし、I夫妻を含む各方面（行政、協会、業者等）からCTを招き、グループに分かれて討論する活動を位置付けた。既習を基に、情報を生かした観光業の発展について深く考えることができただけでなく、地域活性化を担う未来の情報の発信者としての責任を考えることができた。

また、岐阜市の教育委員も務めるIさんは、市の「総合教育会議」の場で、このCTの経験から次のように語られている（岐阜市HP「令和元年第2回 総合教育会議 議事録」より一部抜粋）。

授業に参加させていただき、子供たちが目を輝かせて学んでくれたことが二つあります。

一つは、岐阜市の特性や強みをお話したときです。小中学生は、自分の大切なアイデンティティを形成する大事な時期だと思うのですが、地域の新鮮な情報を、正しくインプットさせてほしいと思います。きっと、こうした授業が、そのきっかけになると思います。

もう一つは、私たちの携わる観光もそうですが、世界を見据えながら、地元で仕事をしている人がたくさんいらっしゃる、いわゆるグローバルな仕事を、ローカルで担っているというお話をしたときです。世界のビッグデータを取りながら、観光業が動いていることをお話したとき、子供たちはとても喜んでくれました。教科書に出ていることが、現実の身近な世界で事象として、この地元で起こっている、それを肌で感じさせてあげることが、今の子供たちには大切ではないでしょうか。

そして、大人が社会の課題を、どのように解決しているのかも、子供たちに見せてあげることが重要だと思います。観光業で、時代とともに団体旅行が少なくなり、個人客にシフトしていく判断を迫られ、私たちはどう経営の舵を切ってきたか、という話などは子供たち一人一人が大変興味深く聞き、まるで自分が経営者にでもなったように考え、素敵な発言をしてくれました。

(2)「社会的事象の見方・考え方」を明確にした 単元構成と学習活動

【実践例2】

3年生「はたらく人とわたしたちの暮らし ～ものをつくる仕事～」

この単元では、地域の人々の生活との関連を考えるために、単元を通して仕事の種類や工程を「着目する視点」として追究した。また、生産者と消費者のそれぞれの立場から多角的に追究し、経済の基礎を身に付けようとした実践である。

仕事の種類に着目して単元の課題を作り、生産工程に着目して仕事の様子について調べた上で、生産工程や仕事の様子の意味を人々の生活と関連させながら考えるようにした。このことで、生産工程には消費者のことを考えた工夫があることに気付くことができた。単元終末には、再び仕事の種類に着目し、他の業種の仕事についても考えた。ここから、地域のお店が、自分の住んでいるまちの人々の生活と密接な関わりがあることを実感することができた。

子供たちが「社会的事象の見方や考え方」を働かせ、多くの立場で追究した学習は、社会的事象を「自分のこと」として捉え、地域との関わりをより強いものにしたいと願うことができた。



【実践例3】

6年生「戦国の世から天下統一へ」

第4時には、学習課題「織田信長だけが、なぜ大量の鉄砲を使うことができたのだろうか」に向かい、子供たちが軍事と経済の両側面から追究し、全体交流で「経済力に支えられた軍事力があつたからだ」という解を見出すことができた。それを受け「経済力を基盤とした軍事力で、戦国の世を統一していく信長を、当時の人々はどう感じていたのだろうか。」と、多角的に考える場面を設けた。

すると、子供たちは「徳川家康のように、他の武将は信長と同盟を組むことで、争わずに生き残ろうとしたのではないか。」「商人は信長の天下統一に協力することで、もっと商業を盛んにしようとしたのではないか。」等の考えを交流し合った。そして、「信長の政策が、たくさんの鉄砲をもって強力な軍事力へと繋がっているんだ」と、経済政策と天下統一の関連について、外交面からもさらに深く考えることへと繋がっていった。

また、450年も前に天下統一を目指し、世界を見据えて日本の政策を考えていた織田信長公の面影を、この岐阜の地だからこそ感じることができた。このことは、子供にとって見えづらい時間の流れを住んでいる場所と繋ぐことによって、歴史という社会的事象を「自分のこと」として捉えることになった。歴史を学ぶ楽しさやロマンを感じたり、日本の偉人と同じ場所で同じことを考えることができる喜びを味わったりするなど、過去～現在～未来の時間軸をたどり、自分自身の生き方を考えることにも繋がった。



【実践例4】

4年生「自然災害から暮らしを守る ～長良川とともに生きる～」

岐阜小学校は、平成29年度から校区に隣接した位置にある国土交通省木曾川上流河川事務所との連携を図り、防災教育を行っている。

平成30年度からは、その「防災・河川環境教育」モデル校の一つとなって、木曾川上流河川事務所と一緒に作成した発問や板書の計画、その他の教材（写真・年表・位置図・動画、公助や共助の取組についての資料等）を活用し、新学習指導要領に基づいた社会科の授業も進めている。

ここでは、令和元年度の4年生の実践について、詳しく述べることとする。

1 研究に関わる本単元の指導の重点

本単元では、校区内の事例を基に、自然災害から人々を守るための公助・共助・自助の働きや、関係諸機関との協力の様子を取り上げる。

その際、実際に調査や見学の活動を通して、自然災害から暮らしを守る人々の願いと対処や予防の事実を、自分の生活とも関わらせながら、繋いで考えられるようにする。このことによって、社会的事象を「自分のこと」として捉えることに繋がるものとする。

また、単元の終末に、台風の接近に伴って大雨が予想されるときに、自分がどのように動くかといかを「マイ・タイムライン」（簡略版）にまとめる活動をする。行政機関や地域の人々の立場とも関連させながら話し合い、何が大切かを選択・判断することで、自分の行動がより具体化される。そのことによって、よりよい社会の実現のためには、地域の方と共に自分自身が積極的に活動することの大切さに気付くことができる。このことが、自分たちの生活する岐阜小学校校区へのさらなる誇りや社会参画への自覚に繋がるものとする。

2 単元構成表（10ページ参照）

3 社会的事象を関連づけて捉え、多角的に考える学習活動

この単元のねらいは、地域の自然災害や関係機関との協力などに着目し、追究することを通して地域の関係機関や人々が、自然災害に対して協力して対処したことや、今後の災害に対して様々な備えをしていることを理解することである。

以下に、具体的な授業実践の記録を示す。

① 第10時「水害から地域を守る人々

～水防団・自主防災隊～

学習課題「水防団長のKさんたちは、7月豪雨のとき、なぜ24時間以上も水防の仕事が続けたのだろうか」に向かって、「7/8早朝の長良川の様子（動画）」「長良川の水位変化とKさんの出勤時間の図表」の資料とともに、CTのKさんに直接質問しながら、追究を進めていった。



その結果、「7月豪雨の際には、長良川の水位はとても高くて危険だったから、Kさんたちは岐阜市や国と協力しながら、私たちの安全のために活動を続けていたんだ。」と気付くことができた。

さらに、共助の考えを引き出すために、「自主防災隊長のTさんとKさんに共通する考えは？」と問いかけ、「地域の方々は、私たちの安全を守るために、絶えず地域の様子を見ながら、関係機関と連携して活動している。」という事実を、的確に認識することができた。

② 第13時「自然災害から私たちの命や生活を守る（自助について考える）」

単元の最後の第13時は、木曾川上流河川事務所から、国土交通省保全対策官をCTに招き、長良川の水害から身を守るために「大雨が降って洪水が予想される時」の行動を話し合うことを通して、地域の一員として、地域の防災のために自分のすべき行動について考える学習を行った。

まず、「いつ、どんな行動をすればよいか」をグループごとに話し合い、ホワイトボードに「マイ・タイムライン」を作成する活動を行った。



そこでは、次のような声が聞かれた。

- ・川沿いに住んでいる人は1～2日前ぐらいに避難したほうが良い。避難ルートや持ち物は事前にもっと早く確認しておく方が安心して逃げられる。
- ・雨や風が強くなってから情報を確認するのは手遅れ。2～3時間で水位が一気に上昇することがあるので、台風が発生したら頻繁に確認しておいた方がいい。
- ・ニュースなどは常に見ないといけない。水害だけでなく土砂災害の危険もあるので、その情報も、いつでも確認する必要がある。
- ・僕は川の近くに住んでいて、家の想定浸水深は2m未満だった。メジャーで計ったら1階は浸水してしまうことが分かったから、川が氾濫する前に早めの避難が必要。

このグループワークを終え、CTの対策官から『自分の家はどこか』『どの避難ルートを使うか』など、水害時の行動を具体的に考えていて、

素晴らしかった。また、ハザードマップから『自分の家の浸水はどれくらいか』『洪水以外に土砂災害の危険もある』などについても考えてくれていて感心した。今、話し合ったことは、家族の人にやってもらうこともあれば、自分だけでできることもあるね。」という講評を受けた。その上で授業後半には、内容を吟味した上で「自分が実際にできること」を考える活動となった。



再びグループで話し合い、仲間の意見も参考にしながら「10歳の自分にできること」として、一人一人が発表した考えは、以下の通りである。

- ・自分は、テレビやお母さん達のスマホを借りて情報を確認することができる。
- ・ぼくは、家の2階など高い所に逃げる。
- ・家族と一緒に、近所のおじいちゃん・おばあちゃんに呼びかけをすることもできる。
- ・私には歩くのが遅い弟がいるので、他人より早めに避難しないとイケない。
- ・いつ、どこに避難したら良いか詳しく分からなかったけど、「マイ・タイムライン」作りを通して、どのタイミングで、どこに逃げたら良いのかが分かった。台風が起きたら、このことを活用したい。



2 単元構成表

単元の入り口の意識…私たちの住む地域では、火事や事故の対策や予防について、警察署や消防署の方、地域の方が一緒になって取り組んでいる。自然災害が起きたときには、国・県・市や地域では、どんな取り組みをしているのだろう。

<着目する視点>

・関係機関の協力 ・変化 ・分布
・公助, 共助, 自助

<考えるための立場>

・行政 (国, 県, 市) ・地域 ・自分

第1時：岐阜県の自然災害【事実認識の授業】

岐阜県では、どんな自然災害が起きたのだろう。
○岐阜県は、時代や地域に関係なく、地震や洪水などの自然災害が起きている。最近の岐阜県は長良川での水害が多く、特に昭和51年「9.12 豪雨災害」は大きな被害があった。

<用語・語句>・自然災害 ・9.12 豪雨災害
・地震 ・西日本豪雨 ・洪水 ・ハザードマップ

第2時：水害の記憶【事実認識の授業】

9.12 豪雨災害とは、どんな水害だったのだろう。
○地域の方の話を聞き、9.12 豪雨災害では、亡くなった方がいたり、家や家財が水につかたりしたことが分かった。

第3時：自然災害の被害の変化【課題を作る授業】

岐阜県の自然災害の被害の数に着目して単元の課題を作ろう。
○自然災害の被害数が減ったことを、国や県や市や地域の取組から考え、そして私たちができることを考えたい。

第4時：家庭や学校で備えているもの【事実認識の授業】

家庭や学校では、水害に備えて、どのような取り組みを行っているのだろう。
○家庭では、水害に備えて、防災グッズの準備をしたり、避難場所の確認をしたりしている。
○学校では、防災倉庫に緊急用のトイレや、ロープなどが備えてある。

<用語・語句>・防災倉庫

第5・6・7時：国や県の取組【事実認識の授業】

水害を防ぐために国や県では、どのような取り組みをしているのだろう。
○水害を防ぐために、国では水門や陸閘を整備している。県は堤防の整備などをしており、各機関が地域の実情に合わせて、関係機関と協力しながら様々な対策を行っている。

<用語・語句>・防災 ・陸閘, ひ門 ・堤防 ・関係機関との協力 ・安全

第8時：市の取組【事実認識の授業】

梶川町貯留槽には、どのようなはたらきがあるのだろう。
○梶川町貯留槽は、岐阜市が大雨のときに水があふれるのを防ぐために作った。「9.12 豪雨災害」のような大きな水害から私たちの命やまちを守りたいという思いがある。

<用語・語句>・貯留槽

第9時：水害から地域を守る人々—岐阜市—【事実認識の授業】

岐阜市役所の人たちは、水害に備えてどのような取り組みを行っているのだろう。
○岐阜市役所の方は、避難の情報を伝えたり、防災訓練を企画運営したりしている。
○また、災害に備えて水道の安定供給のための対策をしている。

<用語・語句>・防災訓練

第10時：水害から地域を守る人々—水防団・自主防災隊—【事実認識の授業】

水防団や自主防災隊の人たちは、水害に備えてどのような取り組みを行っているのだろう。
○水防団の方は、川の水位が上がると陸閘や水門を閉めるための準備に集まっている。
○地域の自治会の方は、避難所の運営のための準備をしたりする。

<用語・語句>・水防団 ・避難所 ・自主防災隊

第11時：命を守る地域の方の営み【意味認識の授業】

水防団長の倉地さんたちは、7月豪雨のとき、なぜ24時間以上も水防の仕事を続けたのだろう。
○水防団長の倉地さんたちが、24時間以上も水防の仕事を続けていたのは、岐阜市などと協力しながら、私たちの安全を考えていたからだ。

第12時：自然災害から私たちを守る人たち【まとめる授業】

私たちの命や生活を守るために行われていることをまとめよう。
○国や県、市や地域の方の取り組みをまとめると、「公助」「共助」「自助」の働きや、協力、連携の仕組みが分かった。

第13時：自然災害から私たちの命や生活を守る(自助について考える)【選択・判断の授業】

長良川の水害から命を守るために、私たちにできることは何だろう。
○水害から命を守るために、国や県や市が行っている対策(公助)や地域の活動(共助)を理解した上で、自分の動きを考えていきたい。ハザードマップで避難経路を確認したり、非常用持ち出し袋を用意したりしたい。

単元の出口の意識…私たちは様々な取組のおかげで、命が守られていることが分かった。しかし、自分の命を守るためには、私たち自身が「公助」「共助」「自助」を理解し、周りの人たちと協力して助け合うことが大切だ。

わたしたちのくらしを水害から守るために、
だれがどのような取り組みをしているのだろう。

6 研究の成果

岐阜小学校の子供たちは、社会科の学びを生かしながら、地域のために活動したり、社会に向けた発信や提案をしたりすることができるようになった。それは、地域教材を開発し、子供の意識が連続できる単元構成をしたことで、子供たちが見通しをもちながら、主体的かつ多角的に学ぶことができるようになったからである。その結果、社会的事象を「自分のこと」として考えることができるようになり、自らよりよい社会の実現を目指そうとする姿に繋がっていると言える。

また、活動や発信をする中で、問い返しや切り返しを受けたときにも、既習内容や資料を根拠に受け答えをすることができるようになってきた。それは、社会への関わり方を考える場などで、様々な立場に立って社会のことを考えることができ、それが姿に繋がったからだと考える。

ここで、象徴的な場面をいくつか紹介する。

(1) 総合的な学習の時間との関連

昨年度の6年生は、7月の社会科「願いを実現する政治」の学習後、総合的な学習「岐阜まち」の時間も活用し、自分たちが考えた「岐阜市役所跡地の活用案」のプレゼンを、児童代表が岐阜市長に直接行ってきた。このことは新聞でも「平日や休日を問わずに、家族連れや子供、高齢者と幅広い人でにぎわう場とするために、楽しめる場を提案、岐阜らしさや災害時の避難場所としての役割を期待する。」と報道された。このような姿が生まれたのは、子供たちが、学んだことを生かしながら、よりよい未来のために多角的な思考を働かせることができたからだと考えている。



5年生は、総合的な学習「長良川」の1月の学習で、「金華橋と忠節橋の間の左岸側は、大正時代から石垣の頑丈な特殊堤になっているのはなぜだろう。」の問いかけに対し、次のような意見交流を行っていた。

- ・理科の「流れる水のはたらき」の実験でカーブの外側は流れが速くなると分かったので、そこがカーブの外側になっていると思う。
- ⇒ (なるほど!)
- ⇒でも、堤防を歩いてみたことがあるけど、あの辺りのカーブは緩くて、その先の大縄場大橋の辺の方が、カーブは急で流れも速いよ。
- ⇒じゃあ、4年生のときに「宝暦治水」で勉強したように地盤が緩いからかもしれないよ。
- ⇒僕は、前の時間に教えてもらったように、当時は左岸側の方にたくさんの人が住んでいたから、そちら側を丈夫にしたのだと思う。

子供たちは「地形」「歴史」「土地利用」などの視点から、根拠を明確にした考えを出し合い、仲間の意見を聞きながら、考えを深めていったのである。年度当初には、挙手も少なく声も小さかった子供たちが、社会科を中心とした取組の中で自信をもち、大きく成長したことを実感した。

(2) 防災教育の充実

昨年11月に開かれた「伊勢湾台風から60年シンポジウム～未来へ繋げる防災教育こどもサミット～」(主催:国土交通省木曽川上流河川事務所)には、【実践例4】で紹介した4年生の児童二人がパネリストとして参加した。二人とも、実に堂々と「自分たちの学び」を語る事ができていた。地域に密接した本物

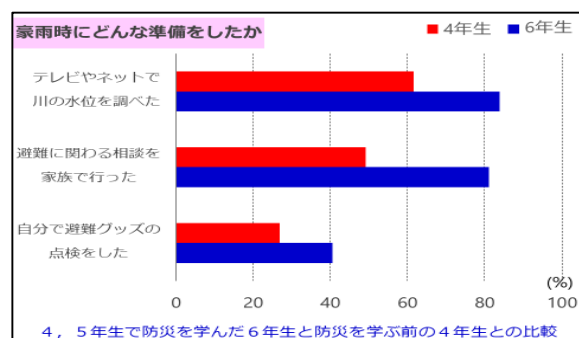


の学習が「自信と誇り」に繋がり、成果として表れたものとする。ここで紹介したことは、今後の小学校現場における「防災教育」のモデルケースとして、多方面に寄与することに繋がったものと思われる。

また、岐阜小学校区では、一昨年度から子供会の活動として「防災キャンプ」が行われている。これは、「社会科『自然災害からくらしを守る』」の学習を生かし、自分たちも地域の方とともに、地域のくらしを守る活動がしたい。」という高学年の子供たちの願いがきっかけとなり、CSの「サマーキャンプ」に、防災の要素を取り入れることに繋がったのである。2年目の昨年度は、子供たちの企画・運営によって「危険予知トレーニング」を行ったり、防災食を作って食べたり、体育館での宿泊を伴う避難所体験をしたりした。



さらに、下のグラフは、今年度7月の「大雨警報による3日間の臨時休業」後に、「どんな準備をしていたか」を示したグラフである。社会科等で防災について学んだ青色の子たちと、まだ学習をしていない赤色の子たちの実際の行動の違いを示したものである。関心の薄かった子供たちの意識の変容が、行動に繋がったことが顕著である。



このような活動を支えたのは、これまでの社会科の授業の充実には他ならない。

7 今後の課題

子供たちが「自分の主張を伝えたい」と思っても、そのスキルが十分でない子もいる。これまでの実践を振り返ると、社会への関わり方を選択・判断したり、よりよい社会の実現を目指して行動に移したりするには、自分の思いを語る場面が必要である。その場面では、子供自身に思いを語るスキルや生活体験が必要だということも分かってきた。そのため、総合的な学習の時間との関連をよりいっそう図ると共に、国語科の「話す・聞く」「書く」、算数科や理科で培う「考え方」などを、これまで以上に関連させながら、学習を行う必要を痛感している。

だからこそ、社会科だけでなく、他の教科で身に付けるべき資質を、どう繋いでいくのかということを具体的に考え、子供たちにとって効果的に働かせるための「カリキュラム・マネジメントの充実」を図る必要があると考えている。

主な参考文献

- ・「小学校学習指導要領解説 社会編
平成29年6月」(文部科学省)
- ・「第57回 全国小学校社会科研究協議会研究大会 岐阜大会研究紀要 令和元年10月」
- ・「岐阜大会記念刊行物 社会科の基礎・基本 令和元年10月」
- ・「岐阜大会大会報告 令和2年2月」
(岐阜県小学校社会科研究部会)
- ・「全小社研 研究集録 第55集 令和2年3月」(全国小学校社会科研究協議会)
- ・「岐阜市史 通史編」(岐阜市)
- ・「金華小百話」(金華小学校)
- ・「次期学習指導要領等に向けたこれまでの審議のまとめ」(文部科学省)